

アイルランド文芸復興期のヒロインの創造 — 史劇『キンコーラ』 *Kincora* における グレゴリ夫人の挑戦

Lady Gregory's Attempt to Create a Powerful Representation of New Irish Women

海老澤 邦江*

Abstract

Lady Gregory created some historical plays which includes not only historical events recorded and recognized as official history, but also legendary folk history. She attempts to describe famous historical events or deeds in terms of women's points of view. This article shows how Lady Gregory creates a new type of female image to symbolize Ireland, and examines her purpose of creating heroines which culturally represent Ireland. Her heroines are not a stereo-typed weak females, depending upon or subject to a male dominant society. On the contrary, Lady Gregory tries to create an independent, strong heroine, who foretells a modern new type of women of the modern era, as well as a new representation of Ireland.

Keywords: Lady Gregory's Irish historical plays, heroines as cultural representation, the Irish literary Renaissance

I. ヴィクトリア朝のグローバル化と文化創造

社会のグローバル化を考察する際の巡回軸として、最も一般的な視点は「言語」である。さらにその話者数や実用度から「人種」「国家」と結びつけられてきた。かつてこれらの属性は他との差別化の指標となり、文化的境界を示した。21世紀の現代においては、情報と交流の発展によってその境界が曖昧になり、多様性の受容と理解が重視されている。一方で、文化レベルにおいては、その境界の曖昧性のゆえに生じる誤解や無理解から、異文化理解にまつわる諸問題が発生しているのも事実である。

ほぼ1世紀近く前の、ヨーロッパにおいても現代とは異なるパラダイムで、固有の文化ならびに異文化理解が議論された。それぞれ特有の文化の結晶化を図り、その固有性を発信する数々の試みがあった。「学問的厳密さに欠け」るが「政治的意義は大きい」という断り書きがつくが、19世紀終わりにE. A. フリーマン (Edward Augustus Freeman, 1823-1892) が発表した論文のテーマが、当時のナショナリズムを反映する「言語」「人種」「文化」を軸とした議論であった⁽¹⁾。19世紀に大衆の人気を博した『パンチ』誌にしばしば描かれるアイルランドは、英国の擬人化ジョン・ブルに虐げられ、弱々しい女性イメージ、あるいは、たくましく凛々しい英国の擬人化ブリタニアに泣きすがり、庇護される虚弱な女性イメージで描かれたヒベルニアであった。これらは、当時の列強の視点から捉えた国際関係を象徴的に表現する戯

2022年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科特任教授 英語文学、文化比較

グレゴリ夫人作・関わった戯曲の主なヒロイン一覧

原題	邦題	制作年	概要、特記事項
<i>Catheleen ni Houlihan</i> *	フーリハンの娘 キャスリーン	1902	イエイツの作品とされるが、後に合作と判明する。アイルランドの表象としての女神が老婆の姿から若い女王へと姿を変え、若者たちを戦いに誘う。
<i>Kincora</i>	キンコーラ	1905 (1909 改定)	グレゴリ夫人による初めての史劇。デーソン人の妻、そして南・北アイルランドの王の妻となったゴームレイを中心にアイルランドを統一する初めての上王プライアンを描く。
<i>Dervorgilla</i>	ダヴォーギラ	1907	12世紀、アイルランドにストロングボウを大将とする英国の軍隊を呼び込んだ元凶となったヒロインを描く。
<i>Grania</i>	グローニア	1909-10	デアドラに比肩される伝説上のヒロイン。グローニアは老王の妃となって生き延びる選択をする。
<i>Deirdre of the Sorrows</i> *	哀しみのデアドラ	1910	シングの遺作をイエイツと共同で仕上げる。老王に恋人の命を奪われた伝説のヒロイン。後世に『トリスタンとイゾー』の原話となったと言われる。

画である。こうした戯画表現は、しばしば、各国の激しいナショナリズムと結びつき、その拡散された画一的なイメージや政治的状态を大衆は受容していた。だが、19世紀の植民地政策の中で、被支配の立場にあった民族や地域が、その自立性を求めたのは一般に歴史の示す通りである。アイルランドにおいて、その典型的な文化運動のひとつと考えられるのが、19世紀末から20世紀初頭にあったアイルランド文芸復興であった。

本論において、アイルランド文芸復興におけるアベイ座で上演された戯曲に描かれたヒロインを例にし、アイルランドを象徴する大国に保護を求める弱者のヒベルニアのイメージを打ち破り、自身の自立のために戦い、誇り高い国家の象徴としてのヒロインの創造過程を考察する。当時の社会事情を含め、弱い性からたくましい女性イメージへの変貌を示し、20世紀がジェンダならびに文化的思想の大きな転換期であったこと、その具現化と具象化を文芸復興の演劇表現にあったことを明らかにする。それらに加えて、グレゴリ夫人の戯曲家としての成長、復興運動におけるアベイ座の社会的役割についても考察する。アベイ座の演劇運動は、必ずしも国家や政府からの公的な援助に恵まれていたわけではない。その出発点は、レイディ・イザベラ・オーガスタ・グレゴリ (Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932) というア

ングロ・アイリッシュのひとりの貴婦人であった。その周辺に才能ある詩人と作家、さらには実業家を集め、国家的文化事業に発展させた。この事業の根幹となったのは、戯曲そのものの豊かで斬新な表現力とともに、その戯曲に固有の文化表現を求め、運動の牽引者層の、政治的のみならず精神的独立を熱く希求した純粋な精神であったことを明らかにする予定である。

II. グレゴリ夫人と史劇

(1) ヒロインたち

まず、アイルランドの神話伝説ならびに歴史に登場した女性が、ヒロインとして登場するグレゴリ夫人の執筆した、あるいは執筆に関わった戯曲の制作年代と戯曲の概要を一覧に示す(上掲)。上記一覧に*を付した2作品、*Catheleen ni Houlihan* と *Deirdre of the Sorrows* については、概要に記したようにイエイツが主となりグレゴリ夫人が手を加えた作品なので、グレゴリ夫人独自の手による作品は、『キンコーラ』『ダヴォーギラ』『グローニア』の3作品に留まる。本論においては、3人の夫を持つことになる王妃、またアイルランドの歴史上他国からの侵略を退け、国家の統一を初めて遂げる時代を舞台にした『キンコーラ』に注目する。なぜなら、グレゴリ夫人が

初めて史劇に挑戦した作品であること、また一般的にヒロインとして受容されるイメージからかけ離れた女性を主人公としているからである。特に本論では、当時としては破天荒なヒロインを描いた意図を明らかにしたい。それとともに、アイルランド方言英語（キルタータン英語）にも目配りしながら、本戯曲で使用される言語表現の特徴にも注目する。

1909年末、グレゴリ夫人はそれまでの5年間を振り返って、公私に渡り多忙でありながらも、充実した歳月を過ごしていたと記している。劇作においても豊饒な時期で、本作『キンコーラ』(Kincora)の他、『小劇7編』(Seven Short Plays), 『白帽章』(The White Cockade), 『ダヴォーギラ』(Dervorgilla), 『キャナバン一族』(The Canavans), 『イメージ』(The Image)といった作品を発表している⁽²⁾。その回顧録によると、息子ロバートとイエイツとのイタリア滞在、ロバートの結婚と孫の誕生に大いに満足し、ロバートが妻としてマーガレットを選んだことをたいそう喜んでいる。一方で、シングの死、甥ヒュー・レインの絵画の帰属問題、特に、アベイ座に纏わる人事や上演演目の選択、俳優たちとの交渉や演出上の諸々の問題が絶えず彼女を悩ませていた。

グレゴリ夫人の真骨頂は、一般庶民を中心にした、ささやかな出来事に翻弄されながらも、庶民の心情と生活を活写した世話物、特にアイルランド方言（キルタータン英語）を駆使した笑劇にあると評価されている。著述を生業とするイエイツやシングらの文学的テーマを持つ戯曲が上演される一方で、グレゴリ夫人の作品は、あたかも間狂言のように、あるいは気楽に楽しめる息抜きの笑劇とみなされていた。夫人自身は、大衆を喜ばせる客寄せのためでも、軽い扱ひの評価を甘んじて受け入れていた。

史劇創作に初めて着手するグレゴリ夫人の意気込みは、アイルランド独立を激しく渴望する情熱に支えられていた。

She wrote of her first attempt at a three-

act historical drama: "Desire for experiment is like fire in the blood." Experiment implies freedom... "one has to go on with experiment or interest in creation fades, at least so it is with me."⁽³⁾ (3幕の史劇に初めて挑戦することについてグレゴリ夫人は次のように言っている。「実験を求める強い願望は血液を燃やす炎のようなものです」ここで言う実験とは自由の意味を含んでいる。…「試し続けなくてはなりません。そうしなければ、創造への興味は徐々に衰退します、少なくとも、私に限っていえば、そのように言えます。』)

これまで短い笑劇を主に手掛けていた夫人が、アイルランド史に関わる劇の執筆に着手し始めると、予想外の困難を経験する。「膨大な資料を処理するのに十分な技が私になかった」(for I had not enough of skill to wrestle with the mass of materials,) が、「歴史にあまりにもこだわり過ぎていたと思ひ至った」(I think I kept too closely to history.)⁽⁴⁾と書き残している。その奮闘の結果、1905年に発表された作品を1909年に改作し、決定版とした。本論においては、全集に収められた1909年版を扱う。

(2) アイルランド初期中世—ヴァイキング時代

さて、『キンコーラ』は史実に文学的脚色を施したとはいえ、背景となる舞台をアイルランドの7世紀から11世紀に渡るヴァイキング時代の史実を基にしている。戯曲に描かれ語られる事象への理解を深めるために、ここに、その時代の社会と王権、記録に残されている主な事件の概要を述べる⁽⁵⁾。

貨幣経済を持たず、牧畜と農耕を中心とし、共同体組織までに到らない散村型農耕社会が続いていた。当時の法文書によると、細かな身分社会で構成されており、その構成は、まず自由民と非自由民の2つに分けられる。後者は、戦争の捕虜や奴隷売買の商品として扱われていた貧者の子供たち、前者の自由民は、農民、貴族、王、知識人層

(詩人、法律家、学者など)、職人などから成り、法的権利が身分ごとに異なる名誉額が設定され、法的に不平等が前提となった社会だ。日常的には、家族三世代がともに暮らす、家族よりも、特に同一の曾祖父を持つ男系の親族集団(デルヴィネ)が重要だった。一方、貴族と農民間は、一般的な封建社会に見られるような契約関係によって結ばれていた。当時の中世初期のアイルランド社会の経済は、男系血縁親族集団の農村社会的な紐帯と、農民・貴族間の契約関係(ケーレの制度)が複合して成り立っていた。

行政、政治上の社会管理については、中世初期アイルランドに特有な組織小国家(トゥアス)が多数林立、政治的分裂状態が続いていた。これまで一人の王によってアイルランドは支配されたことはなく、諸地域を治める「地上の王」が存在し、その数は100から150にも上ったらしい。当時の人口は50万から100万の間を推移したとされるので、小国家(トゥアス)の人口規模は、一つのトゥアスにつき数千から1万程度の計算になる。これら小国家の王は、絶対的な権力を持つわけではなく、人々を守るための対外交渉と軍の指揮を行うが、解決困難な紛争の裁判、政治的意思決定、市と祭事、集会を開催した。そのために王の館に集う者たちは、王と王妃、傭兵、戦士、契約農民の従者、保証人、詩人、法律家、ハーブ・角笛などの楽師、曲芸師、招かれた客、人質など多種多様な人物である。ヨーロッパの宮廷文学にしばしば散見されるように戯曲等の登場人物として共通項もあるが、謎めいた脇役、例えば乞食役が登場するグレゴリ夫人やイエイツの戯曲を予感させる顔ぶれである。

中世アイルランドにおける最高王権の象徴が「タラ王」である。そもそもタラは、新石器時代から埋葬と祭祀の場として使用されてきた場所で、中世においても最高王権を象徴する聖地で神話的位置付けを与えられ、5地方(アルスター、コナハト、レンスター、マンスター、ミーズ)の王たちが全アイルランド王としての「タラ王」の地位を争ったと伝えられている。『キンコーラ』には、こうした複数存在した王権と、その統一に

向けて動き始めた中世アイルランド社会が背景にある。特に、ひとつの「国家」の意識の芽生えと、外部からの侵入を力によって退け人々の生活の安全を守り、共同体の維持と繁栄を目指す王権を戯曲に具象化する。後世の歴史の流れを左右する、あるいは中世と近代を橋渡しする極めて決定的な時代の結節点であったのかもしれない。

『キンコーラ』では、2つの戦いが言及されている。まず、初めに言及されるのが「グレンママの戦い」で、アイルランドに侵攻してきたヴァイキングを国外に退けることに成功した。ヴァイキングの侵攻は、8世紀末に始まり、9世紀終わりにかけて各地で略奪が繰り返される。その後10世紀に入ると、アイルランド各地に定住するヴァイキングたちは、徐々に貿易、航海、漁業の領域で大きな利益と経済的影響をもたらした。しかし、日常的にはアイルランド内では、小国家が林立し、一方外部からのヴァイキング襲来に脅かされていた。さらに、この安定を欠くアイルランドの統治を、島の北半分をマラカイ“Malachi”(マイル・シェフニル2世)が、そして南半分を英名ブライアン・ボルルー“Brian Boru”(ブライアン・ボールヴァ)が治めるように取り決めたのがグレンママの戦後処理だった。

先行きの見通しが不透明な時代に、徐々に才覚を発揮し頭角を見せてマンスター王となったのが、ブライアンだった。取り敢えず、ヴァイキング襲来阻止に成功した後は、国内をいかにまとめるかが、大きな課題となった。それに対峙するのが、アルスター王とタラ王の称号を持つ上王マラカイだった。その両者の間を往来するのが、皮肉なことに、ブライアンの現王妃、かつマラカイの元王妃ゴームレイ“Gormleith”である。彼女は、それ以前にヴァイキングのデーン人の妃でもあった。最初の夫との間には、ダブリンの代官を務める息子シートリック“Sitric”がいた。デーン人の夫の死後に、マラカイに嫁いだことになっている。利権がからむ人間関係をさらに厄介なものにさせたのはゴームレイの血縁関係で、マラカイとブライアンほど強力ではないが、レンスター王メルモーラ“Maelmora”が、彼女の実兄であった

のだ。10世紀から11世紀のアイルランドの覇権を争う、ヴァイキングのデーン人、アルスター王マラカイ、マンスター王ブライアン、レンスター王メルモーラ、ダブリン王の息子シートリクらを結びつけるのがゴームレイであった。錯綜した人間関係と王権争いの決着がつけられるのが、この戯曲で言及される2つ目の戦いが「クロンターフの戦い」である。

(3) 民俗史劇『キンコーラ』

グレゴリ夫人にとって、歴史とは歴史書や正史に記録された事実だけでなく、口承伝説や地域に伝わる稗史を含めたものだった。グレゴリ夫人は、この戯曲を史劇として創作した動機を以下のように述べている。

I hoped then and still hopes...that school-boys and schoolgirls may have their imagination stirred about the people who made history, instead of knowing them but as names. But Brian's greatness lives always in the memory of people.⁽⁶⁾ (当時そして現在でも、私が願っていることは、子供たちには単に名前を知っているというのではなく、歴史を作った人々について想像力をかきたててもらいたいです。ブライアンの偉大さは人々の記憶の中に常に生きております。)

アイルランドの礎を築いた歴史上の偉人たちを、その名称で記憶するのではなく、想像力に訴えることで、現代人の活力を回復させ、次世代に継承させようとする意図を読み取れる。そして、国家のアイデンティティと尊厳を思い起こさせ、アイルランド独立運動に揺れるグレゴリ夫人の生きた時代に共通した不安定な時代背景に親和性を感じられるのではないだろうか。

まず、「キンコーラ」とは、マンスター王ブライアンの居城があった地名である。この居城で語られたアイルランドの覇権をめぐる決定的な歴史の裏舞台が明かされる。登場人物は、ブライアン、上王マラカイ、メルモーラ、デーン人の夫と

ゴームレイの息子でダブリン王シートリクの4人の王たち、それぞれの従者3名、つまりブライアンの従者ブレナーン“Brennain”，マラカイの従者ラリー“Rury”，メルモーラの従者フェラン“Phelan”，ブライアンの先妻との息子マロウ“Murrough”，そしてブライアンの妻ゴームレイ、乞食女の10名である。10世紀末のマラカイとブライアンの2大勢力によって、アイルランドの安定を図ろうとするが、メルモーラとシートリクの離反によって交渉が決裂する経緯を第1幕に、第2幕では、国内のヴァイキング勢力との「グレンママの戦い」を経た戦後処理の様子を描き、第3幕で、ヴァイキング侵攻の新たな危機が迫り、最終的対応策に窮するブライアンだが、「クロンターフの戦い」出陣の決意を最後のクライマックスとし幕が降りる。ヒロインのゴームレイは、第1幕、第2幕の半ば過ぎから登場し際立った台詞も少ないためか、存在感が薄く感じられるが、第3幕においては、マラカイとブライアンを相手に激しい論戦を交わす姿にヒロインとしての圧倒的な存在を表出している。

第1幕は、ブライアンに招待された先夫マラカイと兄メルモーラの、ゴームレイの人物評の会話から始まる。マラカイが開口一番に、ブライアンの偉大さを称えながらも、「女を見る目がない」(But he hadn't a stim of sense, no more than I myself, when it came to the choosing of a wife. p.49)と腐す。さらに続けて「移り気で騒々しいばかりの女、あれと同じ屋根のひとつ下にいたなら、野原の蜂の巣に住んでいるようなものだ」(…she that is a woman to be giddy and full of stir. I give you my word you would have as much ease as being in the one house with her, as to be lodging in a nest of wild bees. p.49)と手厳しい。幕が開いた途端に、庶民の間ではしばしば耳にする夫の妻に対する愚痴は、庶民の生活をよく知るグレゴリ夫人が得意とする表現であったかもしれない。それに対して兄のメルモーラが、「悪い点ばかりをあげつらう、妹の言うことがすることに反対、非難し、針仕事や家事ばかりを押しつけようとする」(You took her on the

wrong side always, crossing and criticizing her, and tormenting her to attend to the needle and to the business of the house. p. 49) とゴームレイを擁護する。だが、マラカイは憤慨して、上王の妃としてふさわしく、何不自由なく惜しみなく物心ともに豊かに与えていたと抗弁した上で、離縁に到った理由を「私個人の事に干渉し、求められてもいない事柄に手出しをした」(she turned her hand to meddling with my own business, and with things she had no call to at all. p. 50) と述べる。王3人が退出した後、3人の従者たちが登場し、各々がアイルランドの現状を語り合うのだが、そうした従者たちの会話の端々から、彼らの目に映る諸王とゴームレイが窺える。例えば、ブライアンの従者ブレナーンが、先妻について次のように叙述する。

Sure we had a Queen in it previously. Murrough's mother that was a girl of the Hynes out of Connacht. A very nice biddable woman, rocking the cradle with Murrough, and thanking God for her own good luck through the Sundays and holidays of the year. p. 54 (コノハトのハインズ家の娘で、マロウ様のお母上だった。赤子を揺り籠であやし、毎週日曜日、祝日には自身の幸運を神様に感謝する、おとなしくてとても素敵な奥方だった)

マラカイが語るゴームレイ像とブライアンの従者が語る先の王妃は、明らかに対極に位置しているのがわかる。20世紀初頭のアイルランドにあっても、子育てを始めとする家事や篤くキリスト信仰を重んじる「家庭の天使」としてのヴィクトリア朝の倫理規範が強く社会に浸透していた。グレゴリ夫人は、女性の旧理想像とは全く異なり、ゴームレイに堂々と立ち回り新世紀に活躍する女性の姿を反映させようとしていた。聊か、庶民にとっては日常性を感じさせるユーモラスな幕開けに加えて、ゴームレイの登場場面は、勇ましさを予感させる。ブライアンの従者ブレナーンが、

「とても感じのよい、率直で、優しい素敵で運のよいご夫人だ、お話するのも幼児にするように気楽にできる」(A very pleasant plain lady, kind and nice and lucky; it's as easy talk to her as a child. p. 54) とその人となりを述べるが、今は鰻漁に出かけており、家事をおろそかにしない「家庭の切り盛りが上手な奥方」(A good housekeeper)であると述べる。従者ブレナーンの台詞は、ゴームレイの性格を端的に形容する数少ない貴重な表現である。従者たちが言葉を交わしているところに、ゴームレイが鰻漁の槍と網を手に戻宅する。諸王の到着と、集会の目的を従者たちから彼女に伝えられる。アイルランド北半分をマラカイ、南半分をブライアンが治めるという企図に従わせようとするが、メルモーラとシートリクは不満を持ち、従わずにキンコーラを去る。つまり、ゴームレイにとっては、2人の夫の同盟に対して、兄と息子の肉親の同盟が離反する形で物別れとなり、後に両者が争い雌雄を決する「グレンママの戦い」となる。

第2幕のプロットの核は、キンコーラで行う「グレンママの戦い」の戦後処理の交渉である。兄メルモーラと息子シートリクは、敗戦軍の虜として登場する。従者たちは、ブライアン王妃がその立場に乗じて、ゴームレイが2人の助命嘆願をするであろうと推測する。そして、その姿をあたかも飼い主にすり寄るような甘える犬や猫に喩える。(Whinging and whining, she will come to him; …I tell you there are women in it, would coax the entire world. p. 64) 実際、ゴームレイは、勝者マラカイとブライアンに自身の命と引き替える覚悟を持って、兄と息子の助命嘆願を行う。マラカイは、ゴームレイが2人を唆し反乱を誘発させたと糾弾し、彼女の願いを退けようとする。アイルランドを「羊」に、侵略しようとする2人をそれぞれ「野犬」と「狐」に喩え、両者に死を求めるのだった。(「野犬を絞首刑にすれば、羊は安心するだろう。狐が死ねば、もう羊を食うことはなくなる」The wild dog that is hanged will worry no sheep. The fox that is dead will devour no sheep. p. 71) グレゴリ夫人の興味深

い比喻表現は、この戯曲中に散見され、彼女の優れた才能を窺わせる。マラカイは、さらに外部社会の諸問題や諸王のやり方に干渉し、拳句の果てには、国家を危機に陥れる騒動に導いたがゴームレイ、女の存在であると非難する。しかし、ゴームレイは、マラカイが治める国の不幸な現状を暴露し、その原因の元凶はマラカイの恐怖心であると反論する。

But look now the way things are in his province, and in every place that is under him! No one travelling your highways, but it is in the byroads men must creep, your wheat fields all headland, the children treading on the hungry grass. They are cursing you for that. Oh, I have heard them. They say they would as soon be under the wicked Danes as under Malachi that is turned careless and turned weak... You are afraid to show kindness, you are in dread of those poor hungry people, ... p. 72 (マラカイの国、彼の統べる全ての地域をご覧下さい。街道を旅する者もなく、脇道をこっそり通らなければならない。麦畑は耕されないまま、子供たちは穂の恵みの無い草を空しく踏みむだけ。人々が呪うのはそれ故。ああ、彼らがこう言うのを耳にしたことがあります。自分たちはまもなく邪悪なデーン人に支配されるのだ、それは軽率、弱虫になったマラカイの元で暮らすのに似たようなもの。…あなたは慈悲を垂れるのを恐れているのだわ、あの腹を空かせた貧民を恐れているのだわ。)

このゴームレイの発言に夫ブライアンが、敗者2人の扱いについて最終的な決断を迫られたかのように、微妙な反応をする。法の遵守と恒久的な平和を重視するブライアンは、2人を許し元の地位に復位させるという温情に溢れた決断を下したのだった。この決断が、ブライアンとマラカイの関係に綻びを生じさせ、それが起因となって上王の地位をブライアンへ移譲する伏線ともなる。

この場面は第2幕の終わり近くに演じられるのだが、ゴームレイの本質に関わる特徴がマラカイの発言から伝えられる。まず1つには、「幸運をもたらす女神」(It may seem to you this queen has brought you luck doing it. She has turned my luck backwards. p. 75) である同時に、凶運をもたらす宿命を持った女でもある。そして以下の印象的な台詞を残してマラカイが退場する。

Great gains, great losses. The crown of Ireland for Brian, the High Kingship for Brian, the treasures of Glenmama for Gormleith. Who has the worst of it? Brian has that Crow of Battle! p. 76 (大収穫に大損失。ブライアンにはアイルランド王の王冠と上王の位、ゴームレイにはグレンママの戦利品の宝物。最悪を手にするのは誰だ、「あの戦いの鳥」を手にするのはブライアンだ。)

ここに、ゴームレイが体現する2つの側面が明らかにされる。つまり、幸運と不幸をもたらす女神、そしてブライアンとマラカイ、勝者と敗者の間を往来する媒介者でもあるが、その関係性を築く一方で、破壊者でもあると言える。しかし、最も強烈なイメージを想起させるのは、神話ではクフーリンを死に追いやり、その死を看取る戦いと死を象徴する鳥である。それが、ゴームレイの姿と重ね合わせることで、第3幕を予感させる象徴的な幕切れとなっている。

第3幕では、「クロンターフの戦い」前夜ともいべき場面が描かれる。第2幕において、ゴームレイの兄レンスター王メルモーラとダブリン王の息子シートリックの助命に成功したものの、彼らが北方ヴァイキングのデーン人と通じ、アイルランド侵攻の画策が露見しブライアンを戦いに駆り立てる経緯を描く。ここでゴームレイの行動と性質は、身内ならびに自身の発言から語られる場面が多い。幕が上がると、所在なげに元氣なく椅子に座るゴームレイを兄のレンスター王メルモーラが訪れる。ゴームレイは、命拾った兄がブライアンに恐縮し死期に近づいている老人のように穏

やかに弱くなっているのが気に食わない。兄は、自分にあれこれ指図する妹を腹立たしく思っていたことを告げ「おまえは幼い自分からいつも言葉がすぎるぞ。子供部屋から私を引っ張りだしあちらこちらと振り回してくれた。それ以来、おまえは3人の夫を苦しめてきたではないか」(You were always wild in your young youth, dragging me there and hither from the nurses. You have had the tormenting of three husbands since that time. p. 78) と非難する。第2幕において、マラカイの臆病と不甲斐なさへの激しい非難が、第3幕においては兄メルモーラと夫ブライアンにも向けられる。

ゴームレイは、ヴァイキング来襲の危機を知り武装を整え、臨戦態勢を取るようにブライアンに強く訴える。ブライアンは、反対に、国内外の敵との戦いに心身疲れ果て恒久的な平和を望み、戦う気力を失いつつあった。特に、乞食女の登場がブライアンの信仰心を篤くすると、ゴームレイは「私は偉大な王に嫁いだのであって、跪いて天国に奉仕する坊さんのような男に嫁いだわけではない」(It was to a great king I came as a wife, not to a monkish man serving heaven on his knees. p. 87) と言い放つ。この第3幕では、ゴームレイの武闘派イメージが強調される。

This is the world and you cannot change the world's old custom. There must be fighting so long as there is anything at all worth fighting for. If there was not war in the world it would be right to make a war, to search out something to hate. Yes, I know all the talk of love and charity, but it is not of malice I am talking, but of the fury of a blast of wind against a heap of rotten dust. p. 82 (これが世の中なのだから、あなたが世の習いを変えることはできないわ。いやしくも戦って守るべきものがある限り、戦わなくてはいけないわ。世界に争いが無くなったならば、憎悪の対象を探し出して、争いを生み出そうとするのも道理になるでしょ

う。私が言っているのは恨みや悪意のことではないの、私が話しているのは腐敗した塵芥の山に吹きつける一陣の憤怒の突風のことなの。)

ようやく、ゴームレイの好戦的な性格を形成する精神が述べられている。単に戦いを好むというのではなく、それを突き動かしているものは腐敗した世界に対する憤怒であることが判明する。国家の安寧に関わる和平と戦いの考え方の相違が明らかになるにつれて、ゴームレイとブライアンの関係の崩壊が始まる。その結果、ゴームレイはレンスター王の兄メルモーラならびに息子シートリックに加勢し、両者が同盟を結ぶデー人への侵攻を受け入れようとする。その事実をブライアンに伝えようとして、その動機をゴームレイは次のように述べている。

I thought myself to be wise, to drag things here and there, to do some great thing, moving men with big words. Oh, I have pulled down the rafters of the roof that sheltered me!...it was not my heart that changed, it was anger and jealousy made me crazy at the time. p. 90-91 (自分が賢いと考えて、あれこれを四方八方に引きずりまわし、何か大きなことをしようとして、偉そうなことばで家来たちを振り回したの。何とことでしょうか、私を守っていた屋根の垂木を引き落とすただけだったの。—中略—変わったのは私の心ではないの。その時、私を気狂いにさせたのは、怒りと嫉妬だったのよ。)

彼女の裏切りが取り返しのつかない誤りと気づき許しを乞うが、ブライアンはゴームレイとの別れを決意し、旅支度を整えて彼女を城外に送り出す。しかし、再びヴァイキング来襲の危機が迫っている事実を知り、あらためて武器を取る決心をするのだった。

この別離は、彼女にとって悲劇であるはずなの

だが、意外なことにブライアンの武装決意を飲み、ブライアンの戦う意志を誇らしく受け取る。恐れを知らず、敵に立ち向かう姿に以前の雄々しい姿を取り戻したかのように、さらに敵を打ち砕いた時、そこに導いた「ブライアンに相応しい妻、正当な妻、幸運をもたらす妻」(“a right wife for him. A right wife, a lucky wife” p.91)、宿命の女であったことが証明されると高らかに宣言するように退場する。

この戯曲に描かれるヒロインは、時代の指導者たちに求められ、その求愛をためらいなく次々と受け入れ、一方で悪びれることなく、裏切りを犯し、その結果の別離も厭わず、3人の夫を次々と渡り歩いた烈女であり悪女である。それ以前に描かれた、ひとつの愛に殉じて死を選択するデアドラの対極に位置している。ヴィクトリア朝の倫理規範の残るアイルランド社会では、極めて稀な女性イメージである。だが、その一方で、モード・ゴンに代表される、結婚制度に縛られず自由な恋愛を貫き、さらには武装闘争も厭わず、アイルランド独立運動や社会運動に積極的に加わり、自身で新しい人生を開拓した女性たちが登場し活躍を始めた時代でもあった。そうした時代の変化を、この戯曲のヒロインに見ることは可能であろう。創作者グレゴリ夫人の人生観をも反映していると言えるだろう。グレゴリ夫人は、女性の自立と国家の自立を重ね合わせて考えていた。自立した明確な女性像を未だ持てないアイルランドの現実をグレゴリ夫人は厳しくとらえ、国家の独立と女性の自立に共通した問題を見ていた。さらに、文学に創造される「宿命の女」や世界文学に共通する普遍的魅力を備えた「傾国の美女」を夢見たイエイツの主張からも、その影響を読み取ることができるだろう。アイルランドを象徴する、新しい女性イメージの構築と女性像の創造は、文化的意義と魅力を訴える試みでもあった。アイルランドの文化的表象としての、女性イメージを、イエイツやシングらとの共作も含めて、民俗史劇にヒロインとしてグレゴリ夫人が生み出しそうと試みたと考えられる。その女性像は、必ずしも一様ではなく、神話性を保持しながらも現実の女たちの感情

や言動に寄り添うものとなった。それ故に、変貌するヒロインから、文化的表象として成熟する女性イメージを読み取れるのではないだろうか。

Ⅲ. 戦いと死の女神モリガン、妖精女王イーファに収斂するヒロイン

『キンコーラ』に描写されたゴームレイの人物評や思考に焦点を絞り、彼女を取り巻く登場人物と彼女自身の発言から、女性像を考察してきた。全編を通じて語られたのは、彼女の周辺の人物を翻弄し、公私を問わず様々な問題に干渉し、災いをもたらす厄介で多情な女の姿であった。いわゆる悪女に分類されるゴームレイは、3人の権力者を相手に次から次へとその妻の地位を獲得できたのは、その地位を自分の利益のために利用する狡猾な知恵を持ち合わせていたように思える。具体的には、自分自身と肉親が生き延びるために、権力者に泣きすがりついても、助けを乞う勇気と相手を説得する雄弁を備えていた。彼女は、対立する利益のために、夫との絆、もう一方では親族との絆の選択に苦悩する。前波清一氏は、グレゴリ夫人の戯曲に共通するテーマとして「二つの忠誠心」、被植民地アイルランドに対する、宗主国イギリスに対する愛国心の葛藤を指摘した⁽⁷⁾。

そうした政治的葛藤に加えて、神話世界の女神が体現する相矛盾する葛藤をゴームレイの中に見る。例えば、第2幕の最後に上王マラカイが彼女を念頭に喩えて発することば「あの戦いの鳥」は、アイルランドの神話に登場する戦いと死の神モリガンの化身である。モリガンは、クフーリンを幾多の戦いの場に導き、最後にはその死を見届ける。つまり、ゴームレイに潜む矛盾は、凶をもたらす不吉なカードであると同時に、それはまた逆に超自然的なパワーを与える吉を示すカードでもある。実際に、ゴームレイは、王妃という地位から得られる情報を巧みに利用し、軍勢を動かし自分の肉親を救う。しかし、それはまた、独立性を犠牲にする危機にアイルランドを陥れてしまう。モリガンの死神イメージは、破壊的エネルギーを体現し、その超自然的属性ゆえに、聖なる

存在でもある。死が生命サイクルの一部を構成していると信じられていることから、モリガンはまた、誕生と生成を内包する創造的エネルギーを秘める存在である。

そのカウンターパートとして登場するのが、ブライアンから指輪を授けられ国中を旅する乞食女である。その指輪を掲げると、持ち主は、どの土地でも身の安全を確保され、自由に旅ができるのだった。アイルランド中を巡り歩いて、ブライアンの居城に戻った乞食女は、ブライアンにアイルランドの平和が達成されたことを告げ、そして武器を置きキリスト教の説く天上世界に目を向けるよう促す。それを聞いたゴームレイは怒りを爆発させ、乞食女を城から追い出す。だが、ブライアンは、乞食女が奨める地上の楽園世界や宗教的瞑想世界を好ましいものと考えようになっていた。上王となっていたブライアンにとって、アイルランドの理想は次のような楽園世界だった。

Ireland, Ireland, I see you free and high and wealthy; wheat in every tilled field, beautiful vessels in the houses of kings, beautiful children well-nourished in every house. No meddling of strangers within our merings, no outcry of Gael against Gael! p. 75 (アイルランドよ、アイルランド、私には自由になり気高く、そして豊かな姿のおまえが見える。どこも耕された畑には麦が、王侯の館には美しい器が、どの家庭にも栄養が行き届いた美しい子供たちがいる。我らの国内では異邦人の干渉はないし、ケルト人が敵対する闘いの声も聞こえない。)

ゴームレイは、夫ブライアンが形而上的理想世界に魅了されるにつれて闘争心と活力を喪失してゆくことに耐えられずにいる。ブライアンの破滅を促す乞食女を叱責し追い出した瞬間に、ブライアンは、妻ゴームレイの暴力的な野心、自尊心、貧しい精神を被う暗闇を非難し悔悟するように厳しく命令する。(Go, Gormleith, to the church and pray, bend your knees, pray and repent,

pray and repent, …p. 86 ゴームレイ、教会に参れ、そして膝を屈して祈れ、祈り悔い改めよ、祈り悔い改めよ、) というブライアンの台詞は、ハムレットの有名な台詞から引いてきたことがすぐに知れ、ここに英国戯曲のヒロイン、オフィーリアを観衆は思い起こすのは困難ではない。だが、この発言が、ブライアンとゴームレイの関係の破綻の始まりとなり、ゴームレイがブライアンを裏切り、敵方に走る結果となる。この戯曲が初めて上演された当時、その劇評では「このアイルランドのマクベス夫人」(“this Irish Lady Macbeth”)と紹介され好評を持って迎えられた⁽⁸⁾。

最後にブライアンの夢に現れる謎の女性イーファに目を向けたい。この女は、多種多様に彩られ姿を変える、私の一族の味方(“many coloured, changing, that was Aoibhell the friend of my race”)とブライアンが語る。ここで想起されるのは、古代アイルランドの神話伝説のよく知られたエピソードのひとつである。ブライアンの祖先につながるマンスター王には、2人の娘があった。その一人を隣国に嫁がせると4人の子供をもうけるが、母親は幼児の残して亡くなってしまふ。そこで、もう一人の娘を後添えとして嫁がせるのだが、その娘がイーファ(アイフェ)であった。イーファは美しい娘であったが、気性は激しく陰険だった。姉が残した子供たちとの関係がうまくいかず、彼らを憎しみ嫉妬し、疎んじる。彼らの殺害に失敗すると、彼らを追いやるために白鳥の姿に変えてしまふ。

神話伝説のイーファと思しき女がブライアンの夢に登場し、不思議な光景を見せる。その様子を乞食女に語り聞かせる。

She came and she called to me and swept the darkness away, and showed me the whole country, shining and beautiful, an image of the face of God in the smooth sea. All bad things had gone from it like plover to the north at the strengthening of the sun… p. 85 (彼女がやって来て私を呼ぶと、暗闇を払い去り、私に国のいたるところが美しく

輝き、穏やかな大海に神の御顔の鏡像を見せるのだ。太陽の光が強くなるにつれて、北方に旅立つ水鳥のようにあらゆる悪が消え去っていた。)

その幻影が消えると謎の女が「この幻と真の平和を再び手に入れたければ、クロンターフに赴け、そこでしか叶わぬ」(“It is only at Clontarf you will come again to that vision and that perfect peace.” p. 85) というメッセージを残して消える。この謎めいたメッセージは、やはりブライアンを戦いに駆り立てる重要なことばとなる。第3幕の終幕間際においても、このメッセージの真意を計りかねているブライアンが描かれるが、真の平和を獲得するには、クロンターフにおける戦いに勝たねば実現できないと理解し、雄々しく立ち上がり武器を取って幕が降りる。正史によれば、1014年の「クロンターフの戦い」においてブライアンの軍勢がヴァイキングの軍勢と戦い勝利を収めるが、ブライアンが戦死することを観衆はすでに知っている。

ブライアンの夢の女は、モリガンでもあり、ゴームレイであるとも言える。人々が平和に暮らす美しく輝かしい国土の実現、完全な平和の実現は、実際には、死がもたらす永遠の休息であったということが示唆されているのである。女の語ることばの真意とは、平和を渴望しながらも、絶え間なく継続する戦いの日々が、戦士たちの熱い愛国心の裏返しなのだ。〈女と男〉〈平和と戦い〉〈忠誠と裏切り〉〈愛と憎悪〉〈理想と現実〉〈創造と破壊〉〈生と死〉など私たちの生や歴史を紡いできた二項対立の原理は、イエイツの作品を通じて広く考察されているが、グレゴリ夫人もまた、その原理の理解者であったと言えるであろう。アイルランドの文化的表象の創造は、アベイ座を中心とした文芸活動、文芸復興運動を通じて、精神文化の成熟した結果の結晶でもあることを知り、かつその必要性を強く認識していたとも考えられる。例えば、普遍的な価値を失うことなく、古代ギリシアのヘレネ、ルネサンス時代のベアトリーチェ、エリザベス朝のマクベス夫人やオ

フィーリアなどが悲劇のヒロインは自律した誇るべき文化的アイコンの地位を獲得していた。特に、イエイツはアイルランドの国民文学創生のためには欠かせない要素だと考えていた。それに共鳴するグレゴリ夫人は、その表象の誕生を戯曲のヒロインに試みたと考えられる。『キンコーラ』のゴームレイは、権力を握る男たちを手玉にとり国家の安寧を揺るがす悪女ではあるが、自分のことばで考えを表明し、物事の良し悪しを判断する。自身の心に従って行動し、かつ自身の生きる道を切り開くことができるたくましい女性である。この女性像に、モリガン、イーファ等に代表されるアイルランドに古代から伝わる神聖な女性イメージを重ね合わせるのは突飛な試みではなかったはずである。むしろ、古代から現代にまでつながる文学的水脈が流れる、文化的表象の創造と誕生は、文芸復興運動のふさわしい、文学的挑戦だったのではないだろうか。グレゴリ夫人の挑戦は、さらに続き、表象の新しいイメージを次作の『ダヴォーギラ』に発見することになる。その論考は、稿をあらためて発表する予定である。

付記

本稿は学術研究助成基金助成金（基盤研究C一般課題番号17K02552 研究課題名「グレゴリ夫人と文芸サロン」）の研究を基に継続推進する研究成果である。

使用テキスト：

Lady Gregory, Saddlemyer, Ann ed., *Tragedies and Tragic Comedies, Collected Plays 2* (the Coole edition Colin Smythe, 1979)

なお本論中の引用には、テキストのページ数を付した。また、引用の日本語訳は拙訳。

《注》

- (1) 三好みゆき [2001] 「イングランドにおけるケルト像」『ケルト復興』（中央大学人文科学研究部 研究叢書 25, 中央大学出版部）240-243 頁
飯田操 [2005] 『イギリスの表象』（ミネルヴァ書房）184-189 頁
- (2) Lady Gregory, [1971] *Seventy Years 1852-1922* (Colyn Smythe) p. 411
- (3) Kohfeldt, Mary Lou, [1985] *Lady Gregory, The Woman Behind the Irish Renaissance* (London, André Deutsch) p. 167
- (4) Lady Gregory, Saddlemyer, Ann ed., [1979]

- Tragedies and Tragic Comedies, Collected Plays 2* (the Coole edition Colin Smythe) p.286
- (5) 盛節子, 田付秋子 [2018] 「第1章 先史時代から初期キリスト教時代」24-47頁『世界歴史体系 アイルランド史』(上野格, 森ありさ, 勝田俊輔編) 山川出版
- (6) Lady Gregory, Saddlemyer, Ann ed., [1979] p.286
- (7) 前波清一 [1988] 『劇作家グレゴリ夫人』(あぼろん社) 74-75頁
- (8) Coxhead, Elizabeth, [1966] *Lady Gregory* (London: Secker & Warburg) p.84